

開催地名	高知県高知市
開催日時	令和6年2月4日(日) 13:30 ~ 15:15
開催場所	高知市総合あんしんセンター 3階大会議室
語り部	大内 幸子 (宮城県仙台市)
参加者	高知市自主防災組織リーダー
開催経緯	本市の自主防災組織の課題として、①活動に参加する人が固定化されている、②コロナ禍を経験し、活動が消極化している、③活動がマンネリ化している等が挙げられる。これらの課題を解消するため、積極的に自主防災活動を行っている高知市内の自主防災組織に、他の組織の活動の参考とするため、活動内容を発表してもらっているが、発表の候補団体が少なくなってきたことや、他市の事例を聞いてみたいという声が寄せられていたため、「防災意識向上プロジェクト」の語り部派遣を活用したものの。
内容	【私の住んでいる福住町の防災・減災の取り組み】 昭和61年8月4日から5日にかけて降水量402mmの大雨による洪水が発生(台風10号)。仙台市においては死者5名、床上・床下浸水32,975戸であった。当時は線状降水帯という言葉は無かったが、線状降水帯が発生していたと思われる。当時は自主防災組織もなく、避難所運営もなかった。これらの数々の災害の経験から、「自分たちの町は自分たちで守る」決意をした。 ○要支援者の名簿作成・住民全員の名簿作成 ○高齢者宅の金具の転倒防止金具の取付 ○危険個所のマップ作成・見守り ○備蓄倉庫の管理(防災用品・防災食) ○災害支援ボランティア活動 ○仙台市内外の町内会・市民グループとの「災害時相互協力協定」締結(14団体と締結) この経験が「福住町方式」を生み出す大きな原動力となる。 【東日本大震災を忘れない】 東日本大震災発災時、福住町にも、七北田川を遡上した津波が家や瓦礫とともに町の近くまで流れてきた。電気・ガス・水道などのライフラインは停止した。500人収容・備蓄品の高砂小学校に帰宅困難者含む約2000人近くの避難者が殺到した。福住集会所では訓練のおかげもあり、すぐに避難所を開設することができた。 また近くの高砂小学校の避難所から、乳児を抱えたお母さんを、立ち上がりの早かった福住集会所に連れてきた。 避難所では赤ちゃん用のミルク粉があっても、お湯が用意できなかったためだ。他にも仮設トイレが外に、かつ和式のものしか設置できず、一部の高齢者の方は苦勞され、体調を崩された方もいた。このことからわかるように、男性目線ではなく、多様性のある避難所の運営が必要だ。

【震災の教訓からの取り組み】

災害に対応する知識もちろん必要だが、災害リスクを想定する知識がないと未然に防ぐことができない。だからこそ過去の災害を伝えていこうと決め、女性のための防災リーダー養成講座を受講し、仙台市地域防災リーダー（SBL）に認定され、仙台女性防災リーダーネットワークの立ち上げを行った。また、総務省東京消防庁「災害伝承プロジェクト」の語り部として活動をしている。

津波避難タワー、災害時給水栓、その他大規模防火・防災・救出訓練、土のう作り、高齢者疑似体験など減災に力を入れている。

【自然災害に備えて】

在宅避難・分散避難、どのように選択しても備えや知識・準備が必要である。防災グッズや食料の用意。（カセットコンロ、ガソリン・非常持ち出し袋・ペット用品・携帯トイレ）

- ・普段から災害が起きた時のとるべき行動を家族と話し合っておく
- ・持続可能な防災・減災の取り組みを継続する事
- ・活動を続ける中で心が折れるときがあるが、あきらめないで！

※一人一人が身近なところから出来ることから始めよう。

【備えること、知識を得ること、訓練をすること、忘れないこと】



開催地より

「自分たちのまちは自分たちで守る」をモットーに、地域で顔の見える関係づくりや、名簿作成、幅広い世代が参加できるよう工夫を凝らした防災訓練の実施等についてお話いただき、アンケート結果でも大勢の方が、役立ったとの評価をしていた。

また、水害や東日本大震災を被災された経験から発せられた、自助・共助の大切さは、言葉に重みを感じ、自主防災活動をどう展開すべきかを改めて考えさせられた機会になった。